幼年童話にみるジェンダー ―育児の描かれ方を中心に―

宮下　美砂子

講義の構成

1.はじめに
2.幼年童話に描かれた「育児」―絵と文章表現
3.先進的な「古典」作品
4.おわりに

１．はじめに

ジェンダーとは　※国連女性機関(UN Women)の定義より
「ジェンダーとは、男性・女性であることに基づき定められた社会的属性や機会、女性と男性、女児と男児の間における関係性、さらに女性間、男性間における相互関係を意味します。こういった社会的属性や機会、関係性は**社会的に構築され、社会化される過程において学習される**ものです。これらは時代や背景に特有であり、変化しうるものです」

なぜ幼年童話のジェンダーを問題にするのか？
▶幼年童話ならではの問題点
①絵本や YA（ヤングアダルト）に比較してジェンダー面で保守的な作品が多い
②「幼年童話」を受容する時期の特徴
③大人への影響も大きいジャンル（読み聞かせを通して大人も受容することが多い）
▶日本における昨今の重大問題とも関わる
①ジェンダーギャップ
②少子化
⇒子どもを持つと「不幸になりそう」という雰囲気が社会に蔓延している（例）「子育て罰」

幼年童話の「育児」の描写に注目する
・『ひとりでよめたよ！幼年文学おすすめブックガイド 200』（大阪国際児童文学振興財団編、評論社、2019 年）から選出
・子どもからみた育児が描写されている作品
「下の子」が育児される様子を「上の子」が見る場面が描かれている作品
⇒読み手の疑似体験

２．幼年童話に描かれた「育児」―絵と文章表現

取り上げる作品

・『トラベッド』（角野栄子作、スズキコージ絵、福音館書店、1994 年）
・『ごきげんなすてご』（いとうひろし作・絵、徳間書店、1995 年）
・『すみれちゃん』（石井睦美作、黒井健絵、偕成社、2005 年）
・『こたえはひとつだけ』（立原えりか作、みやこしあきこ絵、鈴木出版、2013 年）
・『あたらしい子がきて』（岩瀬成子作、上原ナオ子絵、岩崎書店、2014 年）

共通する傾向

▶母親―家事・育児に専念するだけの存在

他の役割は全く与えられず、下の子の世話にかかりきりで上の子に配慮する余裕はない。全員家庭内（私的領域）に留まり社会とのつながりは皆無。手伝いは母の母（祖母）に限定される。

▶父親―家事には関与せず育児は「手伝い」程度

育児には若干関与しても、入浴、読み聞かせのみ。家事の手伝いどころか自らの身辺自立すらおぼつかない者もいる。基本的に父親の「本分は仕事」（家の外）にあるというスタンス。

▶両親の「育児」を見ている「上の子」

・「不満」を抱えている。　・父親ではなく特に母親のケアを欲している。
・「問題行動」を起こして親を困らせる。　・「下の子」を一度は憎む。　・全員「女児」⇒将来の母親
・最後は反省し、姉役割を引き受け一件落着となる。⇒母親役割の継承を暗示させるラストシーン

⇒これらの傾向は、現実の子育て世代の家庭のあり方を写しとっているかのようでもある

専業主婦の妻は夫の５倍以上の家事を負担し、８割以上の家事を負担している（男女共同参画局「男女共同参画白書 令和５年版」より）

３.先進的な「古典」作品

取り上げる作品

松谷みよ子作「モモちゃんとアカネちゃんの本」（菊池貞雄絵、講談社）シリーズから以下の４冊

・『ちいさいモモちゃん』（1964 年）　・『モモちゃんとプー』（1970 年）
・『モモちゃんとアカネちゃん』（1974 年）　・『ちいさいアカネちゃん』（1978 年）

「先進的」といえる要素

▶古さはありつつ幼年童話の「タブー」を軽やかにぶち壊す

・不倫、離婚といった扱いにくいテーマを否定的にせず、かといって軽んじることなく丁寧に

描く。
⇒家族の多様性
・血縁や家族関係ではない「外部」からの保育サポートの活用を肯定的に描く。⇒開かれた育児
・「生」を肯定的、楽観的にとらえる反面、「病」「死」という、避けられない悩みも描かれる。
⇒現実との向き合い方を伝える

４.おわりに

これからの幼年童話
子どもたちが社会化される過程で出会う文化≒幼年童話が、未来のジェンダー不均衡を再生産しないよう、変化を恐れずに努力し続けることは、大人たちの責務。
⇒持って生まれた「性」に規定されない自由で多様な生き方を肯定するような幼年童話がもっと必要（数・種類両面で)。　　★母親役割／父親役割⇒ステレオタイプの見直しから